

翻訳者は何を翻訳したのか
—ロマン主義期ドイツの翻訳理論と実践—

三ツ木道夫
(同志社大学)

It is certain that the translation theories in the period of German Romanticism is one of the most important origins in discussing the modern European translation studies. In general, the literature translation of this period is considered to be based on the “foreignization” principles. However, if the translation theories and their application by J.G. Hamann, J.G. Herder, Fr. Schleiermacher, W. v. Humboldt, and the great writer Fr. Schiller are examined in detail, the translation theories of the time can be described more correctly and accurately. It is elucidated that they attempted to translate the natural process of language generation and that this very process of human beings was the central idea of the translation theories in the German Romanticism.

ドイツ語圏の翻訳思想を考えようとした場合、まっさきに思い浮かぶのは、やはりヴァルター・ベンヤミンの翻訳論「翻訳者の課題(使命)Die Aufgabe des Übersetzers」(1923)であろうか。この魅力的で難解な、あるいは難解である分だけいっそう魅惑的な翻訳論のなかで、ベンヤミンはフランス象徴詩を代表する詩人 S・マラルメの散文を原文のまま引用している。この引用がベンヤミンの論調の難解さ、神秘性を高めているのも事実である。同時にこの翻訳論が、フランスの小説家フローベールやドイツ詩人 S・ゲオルゲに代表される「現代文学」の問題意識の延長線上に位置していることを示す格好の例証でもある。

だがベンヤミンが「ドイツ第一の翻訳者」M・ルターは言うに及ばず、古典作家 J・W・ゲーテの翻訳論にも言及していること、これは見落とされがちな事実である。ベンヤミンの念頭にあるのはおそらく、ゲーテが『西東詩集』に付した「注解と論考」のなかの短文「翻訳さまざま」であろう。

ベンヤミンはごく若い時期の言語論「言語一般および人間の言語について」(1916)において、通常とは異なる翻訳概念を展開している。ふつう翻訳といえば言語間でなされる、とりわけ文書による言語行為を思い浮かべるが、人間の言語同士の翻訳ではない「翻訳」、いわばメタレベルでの「翻訳」について思弁が展開されている。その際引き合いに出されるのが、「北方の博士」と呼ばれた思想家 J.G.ハーマンの言語論なのである。

さらにベンヤミンは学生時代から W.v.フンボルトの言語哲学に親しみ、後年フンボルト選集

の編者となるチャンスさえあった。これはベンヤミンがいわゆる「フリーの文筆家」としてデビューする時期のことである。ベンヤミンにしても、自らの思考を紡ぎ出すにはハーマン、ゲーテ、フンボルト等の、過去の思想的遺産を糧とする必要があったことになる。

こうしたロマン主義時代のドイツ翻訳論をどう評価するのか。これは今日では狭義のドイツ文学・ドイツ思想研究の専権事項ではなくなっている。たとえば F・シュライアーマハーの翻訳論講義「翻訳のさまざまな方法について」は、今日なお翻訳論の古典と見なされ、ドイツ語から英語等の言語に翻訳されるばかりでなく、自ら翻訳論を構築しようとする論者の拠り所にもなっている (Venuti 2005)。またフランス語圏においても「ロマン主義ドイツ」の翻訳論に関して浩瀚な研究書『他者という試練』が書かれ (ベルマン 2008)、それが自国フランスの翻訳文化をめぐる論争のきっかけともなっている (辻 1993:136)。

ゲーテは先にふれた「翻訳さまざま」においては、翻訳の種類を、1)「簡素な散文訳」、2) いわゆる「自由な翻訳」、および 3)「忠実な翻訳」に分けている。だが、この前の段階では「自由訳」と「忠実訳」というふたつの翻訳方法を区別しているだけである。これはヴィーラント追悼文「我が友ヴィーラントを記念して」(1813)にみられる区分である。ゲーテはこう語る。「翻訳にはふたつの原則があります。一方の原則が要求するのは、異国の作家を私たちの側へもたらすこと、しかも私たちがその作家を自国の作家とみなすことができる程に、というものです。他方の原則はこれとは逆の要請を突きつけます。すなわち、私たち自らが異質なものの側へ赴き、異質なものが置かれている状況その言語用法、その特性に身を置くべきなのだ、という要請です」(三ツ木 2008: 6)

前者の場合、翻訳者は原作の意味を保存したままできるかぎり、原作の表現形式から自由に翻訳することができる。この自由のおかげで翻訳者は原作者を「自国の作家とみなすことができる程」までに自国の言語文化の中に取り込むことが許されるのである。「目標言語 Zielsprache/ Target Language」を重視する翻訳方法である。

後者の場合、むしろ原作の意味を保持することが大前提となるが、ある程度無理な翻訳文ができあがるのは十分予想される。翻訳者は読者を「異質なものの側へ」と動かさなければならぬからである。これは「起点言語 Ausgangs-sprache/ Source Language」に重きを置く方法である。

だが、シュライアーマハーの翻訳論講義「翻訳のさまざまな方法について」では、このふたつの順序が入れ替わっている。「作家をできるだけそっとしておいて読者のほうを作家に向けて動かす、あるいは読者のほうをできるだけそっとしておいて作家を読者に向けて動かす」(三ツ木 op.cit:38)という二者択一である。翻訳の「忠実」原理が先に置かれたのには実は理由がある。シュライアーマハーにとって、また彼が考えたドイツ語およびドイツ民族の歴史的使命にとって、最初の方法、翻訳文のレベルで読者を異質なものに触れさせることだけが望ましいものであった¹。原作の表現形式を再現することを重んじる翻訳方法によって、翻訳者の言語すなわちドイツ語は絶えず異化される。読者は自らの言語習慣に浸かったままではいられなくなるのである。この翻訳方法を仮に「異化的翻訳方法」と呼んでおくことができるだろう。

対する第二の方法では、異質はずの原作の表現形式は取り除けられ、慣れ親しんだ母語の表現に置き換えられる。異質なものは同化・吸収されてしまう。この方法は「同化的翻訳

方法」と呼ぶことができる。ゲーテ時代には、この「異化」か「同化」か、「忠実」か「自由」かという問題について、少なくとも方法意識という点では、もっぱら母語の「異化」を目指す、「忠実」の翻訳原理が選ばとられたとあってよい。

しかし問題は「忠実」原理が優勢な中で、翻訳者は何を目指したのか、いや何を指すことを求められたのかということである。ハーマンは、「へりくだり」という神学的思想から「他者の言語へと自らを移し置く」というメタレベルの「翻訳」概念を導きだしたが、以下で詳論されるように、ハーマンはまさにこの時代の翻訳思想の先駆けとなっている。さらに J・G・ヘルダーは翻訳によって自らの表現手段であるドイツ語そのものを鍛え上げることを目論む。シュライアーマハーも、翻訳によって異質な要素をドイツ語に取り込むこと、それによって民族の精神そのものまでが変容することを願った。劇作家であり詩人だった Fr.シラーのヴェルギリウス翻訳は当初、原作の形式を模倣することを目指したが、のちには原作とはまったく異なる詩形式での再現を試みていた。

このシラーの翻訳方法の変化から翻って、ハーマン、ヘルダー、シュライアーマハーの思想を考えると、彼らの翻訳論の目指したものが明らかになる。ハーマンの出発点は「発話行為 Reden」であり、ヘルダーも逐語訳ではなく、原作の「音調 Ton」の保持を翻訳に求めていた。シュライアーマハーも、文書に限らず人の口から出る「言説 Rede」を移し替えることを翻訳の主要な任務としていた。つまり原作の意味や形式を逐語的に再現することではなく、生き生きとした言語生成の場をとらえること、あるいは翻訳によって生き生きとした「言説」を復活させることが考えられていた¹。現代フランスの詩人、翻訳家にして翻訳理論家でもあった H・メショニックも、フンボルトあるいはバンヴェニストの言語理論を介して「セマンティック(意味産出の言語学)」へと向かい、ディスクールとリズムとの関連考察へと進んでいった。

ドイツ語の“Rede”ないし“reden”を「discours ディスクール」と訳すにせよ、「utterance 発話」と訳出するにせよ、「言説」と翻訳するにせよ、何らかの記号の意味を別の言語に移すのではなく、人間の発話に見られるような言語生成の場そのものを翻訳すること、それがロマン主義ドイツの翻訳論の中心的な考えであったことがわかる。「忠実」原理が優勢であったとしても、決して生命のない形式への「忠実」が求められたわけではなかった。

(今回の小特集は、ドイツ語圏の翻訳論・言語論に関する研究グループによる共同研究の成果であり、現在望みうるもっとも適切な発表の場が与えられたことに感謝いたします。)

.....

【著者紹介】

三ッ木道夫(MITSUGI Michio)同志社大学教授。上智大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(比較社会文化)。ドイツ語学ドイツ文学および言語思想史専攻。

.....

【注】

1 シュライアーマハーの翻訳論講義の全体像に関しては、三ッ木(2011)43頁以下、またシュライアーマハーの「言説」概念と西欧の言語伝統との関係については、三ッ木(2010)97頁以下を参

照されたい。

【引用文献】

Venuti, L. (2005). *The Translation Studies Reader*. (2nd Ed.) New York/ London: Routledge.

ベルマン, A. (2008) 『他者という試練』(藤田省一訳) みすず書房。

辻 由美 (1993) 『翻訳史のプロムナード』 みすず書房

三ッ木道夫 (2008) 『思想としての翻訳』(編訳) 白水社

三ッ木道夫 (2010) 「フリードリヒ・シュライアーマハーの翻訳論」『シェリング年報』第 18 号 日本
シェリング協会

三ッ木道夫 (2011) 『翻訳の思想史』晃洋書房